

## 인사말

매년 가을 주일한국문화원에서 개최되는 「Challenge Art in Japan」전은 2012년에 시작되어 올해 6회째입니다. 원래 일본의 미술대학에 재학 중인 한국인 유학생들에게 작품 발표 기회를 마련해준다는 취지로 시작하였으나, 작년에는 일본 학생들도 참여하였고 금년에는 일본뿐만 아니라 중국 학생들도 참여하게 되어 이제는 「Challenge Art in Japan」전이 동아시아 젊은 미술학도들의 국제교류의 장으로 그 위상이 높아진 것 같습니다.

수많은 대가를 배출한 일본 미술의 명문대학 타마 미술대학과 금년 전시를 공동 개최하게 된 것은 주일한국문화원으로서도 큰 기쁨이었습니다. 무한한 가능성을 지닌 젊은이들이 오늘 이 전시를 위해 한 마음, 한 뜻이 되어 수 개월을 준비하는 것을 지켜보는 것은, 그리고 이들이 미래에 세계무대에서 큰 활약을 할 것이라고 상상해보는 것은 더욱 큰 기쁨이었습니다. 이 젊은 예술가들의 마음과 마음이 그대로 미래로 이어지고 확산되면 동아시아 3국의 장래는 찬란할 것이라는 기대를 가져봅니다. 좋은 작품 출품하느라 애쓰신 학생들의 노고를 치하하고, 앞으로 더욱 정진하실 것을 당부 드립니다.

멋진 전시가 될 수 있도록 힘써주신 타마미술대학 다테하타 아키라 학장님, 모토에 구니오 교수님 특별 협력해 주신 콜롬비아 인터내셔널 스쿨, (주)YM 컨설팅을 비롯한 관계자 분들께 진심으로 감사의 말씀 드립니다. 전시를 관람하시는 모든 분들께는 이들 청년 예술가들이 잘 성장할 수 있도록 많은 관심과 성원을 보내주시기를 부탁드립니다.

2017년 11월  
주일한국대사관 한국문화원장  
김현환

## ご挨拶

毎秋、駐日韓国文化院で開催している「Challenge Art in Japan」展は、2012年から始まり、今年で6回目を迎えました。もともと日本の美術大学に在学中の韓国留学生に作品発表の機会を設けるという趣旨で始めましたが、昨年は日本の学生も参加し、今年は、日本だけでなく、中国の学生も参加することになり、今では「Challenge Art in Japan」展が、東アジアの若い芸術家たちの国際交流の場として、その地位が高まったようです。

多くの大家を輩出した日本美術の名門大学である多摩美術大学と今年の展示を共同開催することになったのは、駐日韓国文化院としても大きな喜びでした。無限の可能性を秘めた若者が、この展示のために一心一意になって数ヶ月にわたり準備することを見守ることは、そして彼らが将来的に世界の舞台で大活躍すると想像することは、さらに大きな喜びでした。この若い芸術家たちの心と心がそのまま未来につながって拡散されると、東アジアの3カ国の将来は燦爛とするだろうと期待しています。良い作品を出品するために頑張った学生の皆さんの努力を称え、同時に今後一層精進されることを願います。

素敵な展示になるようご尽力賜りました多摩美術大学の建畠哲学長、本江邦夫教授、特別協力のコロンビアインターナショナルスクール、(株)ワイエムコンサルティングを始め、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。そして、ご観覧の皆様には、この場に集った青年アーティストたちが立派に成長できるよう、引き続きご声援とご関心をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。

2017年11月吉日  
駐日韓国大使館 韓国文化院長  
金現煥

## ご挨拶

多摩美術大学の博士後期課程に在籍する韓国、中国からの留学生と日本の学生の合同展多摩美術大学× Challenge Art In Japan 2017—#TAMABI\_HAKASE—が、駐日韓国大使館韓国文化院で開催されることになりました。多摩美術大学のなかでもっともグローバル化が進んでいる博士後期課程ならではの企画ですが、見方によってはきわめてユニークであり大胆でもあるこのような展覧会を共催していただいた韓国文化院の皆様、とりわけ金現煥院長のご尽力に深く御礼申し上げます。

普段はキャンパスのそれぞれのアトリエで制作と研究に励んでいる三カ国の学生たちにとって、韓国文化院という、まさしく国際的な文化交流の拠点に集い、手を携えて展覧会を開催するという事は、学内では得難い貴重な経験であると同時に、将来のアーティストとしての活躍にも大きく寄与することになるでしょう。また学生相互の意見の交換だけではなく、会場を訪れる美術関係者と交流し、市民の皆様の声に直接に触れることができるという点でも、実に有意義な機会であると思われまます。

多摩美術大学はもとより自由でオープンな学風を特色としていますが、それは学内ばかりではなく、芸術文化に関わる機関との相互協力を積極的に推進するという方針にも結び付くものでなければなりません。その意味でも韓国文化院での多摩美術大学× Challenge Art In Japan 2017—#TAMABI\_HAKASE—は、もっとも歓迎すべきプロジェクトであるに違いありません。出品する若きアーティストたちが、展示場での語らいを通じて改めて自らのアイデンティティーを見据え、また多文化主義的な視野の広がりをもつことを強く期待しています。

会場を訪れる皆様には、彼ら、彼女らの真摯にして意欲に満ちた姿勢をあたたかい目で見守って下さるようお願い申し上げます。本展の実現に協力を賜った関係者の皆様に感謝しつつ、私からのご挨拶とさせていただきます。

2017年11月吉日  
多摩美術大学学長  
建畠哲

## ご挨拶

今年の5月だったと思います。多摩美術大学の国際交流委員会で、いつも元気で澁淵とした佐竹邦子委員長から駐日韓国文化院の「Challenge Art in Japan」のご提案について伺いました。多摩美大に学ぶ韓国の留学生たちを中核にしてグループ展を構成してみないか—優秀な学生が多いから、これは面白いぞ。私は見知った留学生の顔をあれこれ思い浮かべながら、でも具体的な選別はどうするのだろう、これは大変だなと、ここまではぼんやりと、他人事として聞いていました。ところが委員長は、それを博士課程で担当したらどうか、人数もちょうどいいだろうし、といきなり切り込んでこられたのです。ハッとした私は瞬時にいろいろな考え、無下に断らず、いったん研究室に持ち帰ることにしました。いちばん気になったのは、展覧会の予定されている晩秋が学位論文提出の直前にあたっていることでした。執筆に専念したい学生もいるにちがいない。でも、韓国文化院からのせっかくのお話—ここは各自の判断に任せよう。こうして「# TAMABI\_HAKASE」展が始動することになりました。

韓国の学生たちについては私には特別な思いがあります。2001年に立ち上げた多摩美大の博士課程の、彼ないし彼女たちは熱意と野心に溢れた主要なメンバーでした。今の博士課程の、「手」と「頭」を弁証法的に連動させつつ、より高い次元の制作をめざす根本的な姿勢はそうした学生たちとの対話、添削等の試行錯誤を伴った交流を通じて形作られたものです。

博士課程の学生は単なる学生ではない、実質上の社会人であるというのが私の基本的な立場です。ですから、今回のプロジェクトについても「主役はあなた方だから」と言い続け、関連行事も含めて、すべてを学生たちに委ねました。そのさいに、駐日韓国文化院の誠意溢れる皆さまには本当にお世話になりました。この場を借りて、深く御礼申し上げます。

駐日韓国文化院—四谷三丁目駅から徒歩数分の絶好の会場で、ふだん「山」で暮らしている博士課程の学生たちの作品がどのように映えるか、今からとても楽しみです。

2017年11月吉日  
多摩美術大学大学院美術研究科長  
本江邦夫

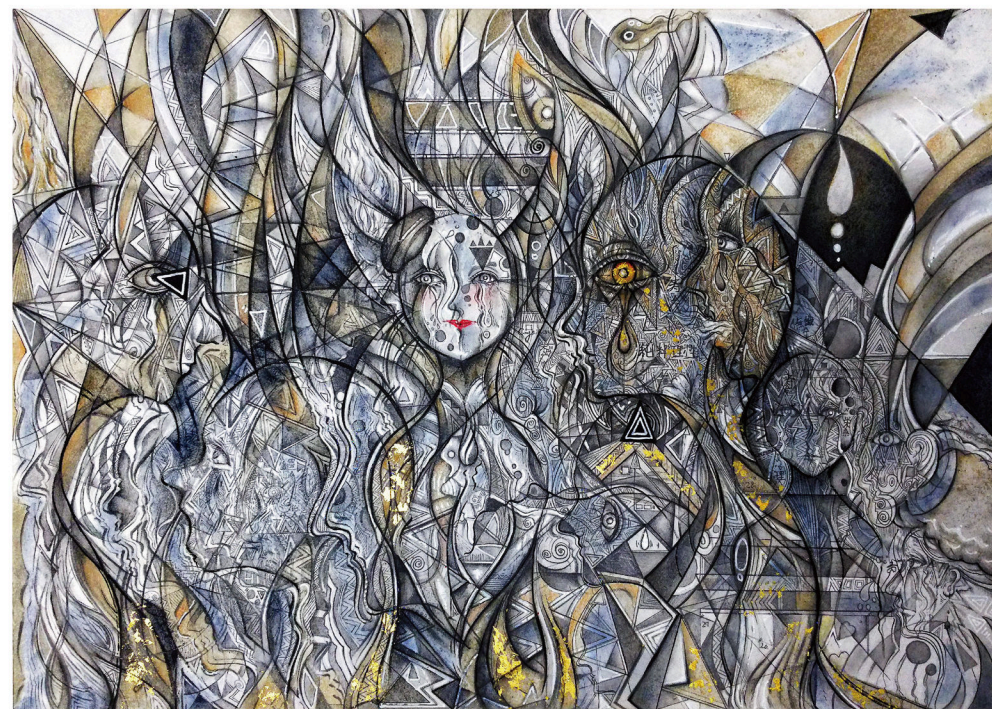
- 1988 横浜 爆誕
- 2014 第82回日本版画協会版画展 A部門 初入選 (以降連続出品)
- 2014 第5回「ドローイングとは何か」展 初入選 (以降連続出品)
- 2014 VOL.4 U35・500 ARTISTS JAPAN EXHIBITION 入選
- 2014 第25回全日本アートサロン絵画大賞展 初入選・優秀賞 (以降連続出品)
- 2016 第93回春陽展 版画部 初入選 (以降連続出品)
- 2016 ArtBridge FAIR vol.1 入選・審査員賞 (熊田泰章氏推薦)
- 2016 第19回多摩美術大学校友会小品展2016 チャレンジ賞 受賞
- 2017 Views on contemporary Japanese Printmaking - Cyprus 2017 選抜
- 2017 MONSTER EXHIBITION IN 2017 入選
- 2017 第10回高知国際版画トリエンナーレ展 入選
- 2017 平成29年度多摩美術大学校友会奨学生
- 2017 梶谷令初個展 第一回ギャラリー志門 University Selection 企画 Vol.2
- 2017 SHIBUYA AWARDS 2017 in 第9回渋谷芸術祭 入選

私は、ひとしきり足掻いての闘争も虚しく、孤独に迎え入れられた人間の一人だ。叫び出したくなるような一人きりの現実の中で、私は〈見守ること〉が自分に課せられた最初で最後の役割なのだと思えた。私の作品はお守りであり、見守る者たちの痕跡である。

「群れない、問わない、関わらない。」

今までもこれからも、このことだけが私を捉えて離さない。

作品が作品として配慮される最初の場としての展示空間とそこにおける作品存在の行方—ハイデッガー著『芸術作品の根源』に基づく存在論を中心的な手掛かりとして—



《私、ここに》2016 ケントボードに鉛筆、金箔、顔料、パウダーチーク 25.7 × 36.4 cm



《まだまだ帰って来れるうちに》2017 スワローリトグラフィンキ、ジェルメディウム、コピック、顔料 62.5 × 91.5 cm



《TRICKSTER》2017 スワローリトグラフィンキ、ジェルメディウム、コピック、顔料 62.5 × 91.5 cm